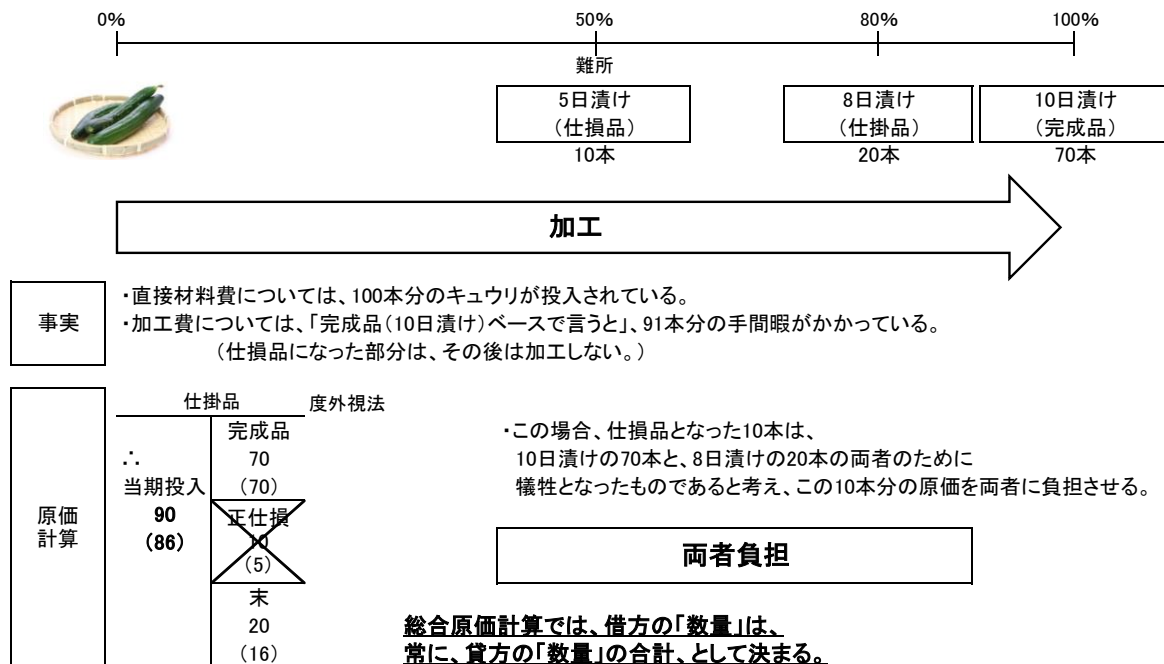


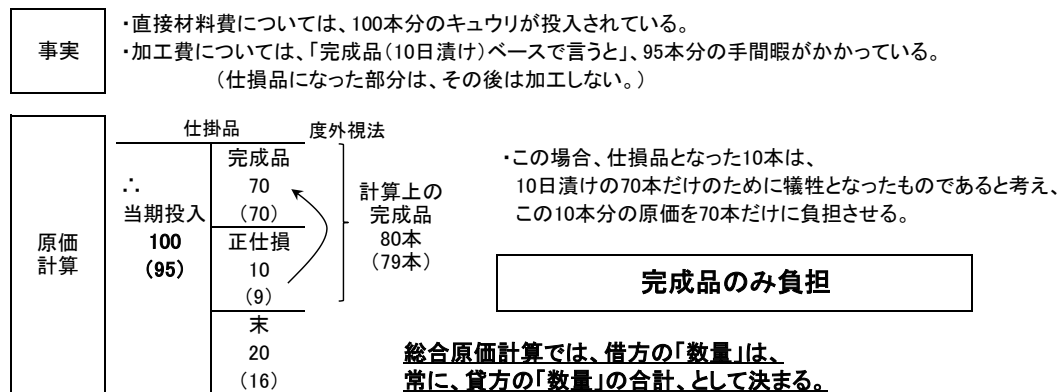
★度外視法 (P118)

(例)「キュウリの10日漬け」を製造している漬物メーカー

・5日目に当社唯一の難所があり、当期はそこで仕損品(不良品)が10本発生し、
期末日に、10日漬け(完成品)が70本、8日漬け(仕掛品)が20本あった場合、



・仮に、難所は9日目であった場合、



★非度外視法 例題集【6-4-1】

ケース1 正常仕損が工程の75%の点で発生するとき。

AM			
652,800 @272 (581,400) (@290.7)	貸方計	完	1,500
		正仕	400
		末	500
			(200)
			408,000 (436,050)
			108,800 (87,210)
			136,000 (58,140)
			+196,010
			196,010 ← 足す！
			+0
			1,500
			0
			1,040,060
			194,140

ケース2 正常仕損が工程の25%の点で発生するとき。

AM			
652,800 @272 (581,400) (@323)	貸方計	完	1,500
		正仕	400
		末	500
			(100)
			(200)
			408,000 (484,500)
			108,800 (32,300)
			136,000 (64,600)
			+105,825
			141,100 ← 足す！
			+35,275
			1,500
			500
			998,325
			235,875

ケース3 正常仕損が工程を通じて平均的に発生するとき。

AM			
652,800 @272 (581,400) (@306)	貸方計	完	1,500
		正仕	400
		末	500
			(200)
			408,000 (459,000)
			108,800 (61,200)
			136,000 (61,200)
			+150,000
			170,000 ← 足す！
			+20,000
			1,500
			200
			1,017,000
			217,200

例題集【6-4-2】異常仕損費の処理

ケース1 非度外視法 ←テキストP130①

AM			
1,320,000 @ 1,100 貸方計 1,200 (1,000) (1,078,000) (@ 1,078)	完	800	880,000 (862,400)
	正仕	100 (20)	110,000 (21,560)
	異仕	100 (40)	110,000 (43,120)
	末	200 (140)	220,000 (150,920)

800 → +95,680 } **1,838,080**
 100 → +11,960 } **165,080**
 200 → +23,920 } **394,840**
 100 → +11,960 } **165,080**
 200 → +23,920 } **394,840**

(注) 正常仕損は、定点発生のため、負担割合は、完成品:期末仕掛品:異常仕損品=1:1:1

ケース2 度外視法(完成品・期末仕掛品・異常仕損品負担) ←テキストP130②B

AM			
1,320,000 @ 1,200 貸方計 1,100 (980) (1,078,000) (@ 1,100)	完	800	960,000 (880,000)
	正仕	100 (20)	110,000 (21,560)
	異仕	100 (40)	120,000 (44,000)
	末	200 (140)	240,000 (154,000)

800 } **1,840,000**
 100 } **164,000**
 200 } **394,000**

ケース3 度外視法(完成品のみ負担) ←テキストP130②A

AM			
1,320,000 @ 1,100 貸方計 1,200 (1,000) (1,078,000) (@ 1,078)	完	800	990,000 (883,960)
	正仕	100 (20)	110,000 (43,120)
	異仕	100 (40)	110,000 (43,120)
	末	200 (140)	220,000 (150,920)

800 } **1,873,960**
 100 } **153,120**
 200 } **370,920**

ケース4 度外視法(完成品・期末仕掛品負担) ←テキストP131②C

i		ii	
AM		AM	
1,320,000 @ 1,100 貸方計 1,200 (1,000) (1,078,000) (@ 1,078)	完	800	968,000 (880,749)
	正仕	100 (20)	1,210,000 @ 1,210 (1,034,880) (@ 1,100.9...)
	異仕	100 (40)	110,000 (43,120)
	末	200 (140)	242,000 (154,131)

800 } **1,848,749**
 100 } **153,120**
 200 } **396,131**

↑ 分離把握するために、最下方に書く。

「正常仕損費を含まない単価」(テキストP131)を計算。

★「度外視法」or「非度外視法」は、あくまでも、インプット原価を完成品と期末仕掛品に按分する際に、
 「正常仕損品」に関するコストの計算を、度外視するかしないかの話である。
 上記の i は、実はインプット原価を確定している段階の話である。
 上記の iiこそが、インプット原価の按分の段階の話であり、ここで初めて度外視する。

★等級別総合原価計算(第1法か第2法／第3法の見分け方) (P145～147)

	第1法	第2法または第3法
具体例	缶ビール(500ml・350ml)	Tシャツ(S・M・L)
生産データの仕掛品	等級別に区別されていない。	等級別に区別されている。
等価係数	1セットのみ。	直接材料費と加工費の2セット。

★等級別総合原価計算(第2法か第3法の見分け方・解き方) (P146～147)

	第2法	第3法
呼称	単純総合原価計算に近い方法	組別総合原価計算に近い方法
問題文の指示	右記(⇒)以外	等価係数は「 当期製造原価 を按分する際に使用する。」
考え方	「基準製品」に寄せる。「基準製品」で言えば、何kgか何個か?など。	
解き方	基準製品に寄せたうえで、単純総合原価計算を行う。	先に、直接材料費と加工費の按分先の(組別の)BOXを書く(第2段階)。 ↓ その当期投入量を等価係数を用いて換算し直し、按分計算をする(第1段階)。 ↓ その後、再度、第2段階に押し返す。

★連産品の特徴と原価按分の必要性 (P151)

- ・不可避免的に結合して生産され、原料消費量や作業時間を区分把握できないのが、連産品の特徴。
↓ したがって、
- ・因果関係を反映した正確な製品原価の計算は不可能。
↓ しかし、
- ・F/S作成の観点から、連結原価の按分は必要。
↓ したがって、
- ・物量法や市価法によって計算せざるをえない(P152～)。

★副産物の処理 (P160)

原則	副産物の価額(評価額)を総合原価から控除する。
容認	軽微な場合は、その売却収入を原価計算外の収益とすることができる。

- ・原則処理のうち、売却する場合、評価額は次のように算定する。

①見積売却価額 — 販管費見積額 ←副産物からは利益は発生しないという考え方

- ・精肉店である当工場において、豚を連産品工程に投入し、分離点までに直接材料費と加工費が1,800発生した。
- ・主産物として豚ロースと豚ヒレ、副産物として豚革が産出された。
- ・このうち、豚革は、運送費40を支払って皮革加工業者に持ち込めば、240で販売できると見込まれている。
- ・豚ロースと豚ヒレは当社の店頭で、合計400の販管費が発生するとともに、合計2,560で販売できると見込まれている。
- ・このときの主産物と副産物の予想P/Lを作成すると、右のようになる。

仕掛品			主産物	副産物	全社
1,800	主産物A 豚ロース	1,600 (差引)	売上高 2,560	240	2,800
	主産物B 豚ヒレ		売上原価 1,600	200	1,800
			売上総利益 960	40	1,000
	副産物 豚革	200 ← 240 - 40	販管費 400	40	440
			営業利益 560	0	560

利益ゼロ!
↓
全社的な営業利益率
(通常の利益率20%)

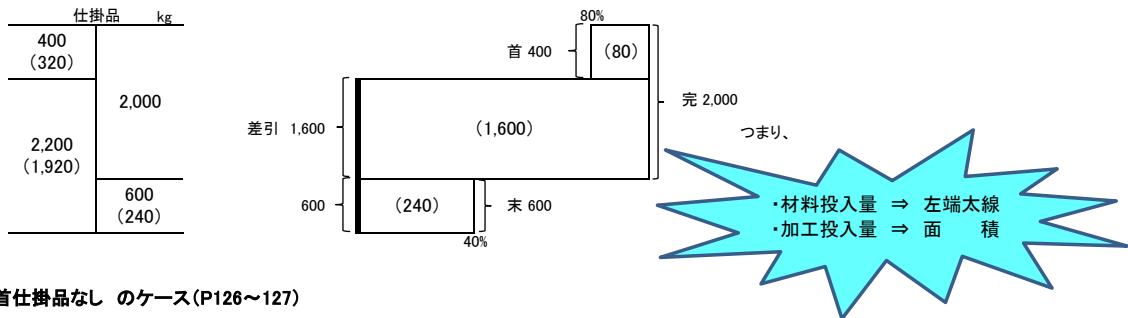
②見積売却価額 — 販管費見積額 — 通常の利益の見積額 ←副産物からも利益は発生するという考え方

仕掛品			主産物	副産物	全社
1,800	主産物A 豚ロース	1,648 (差引)	売上高 2,560	240	2,800
	主産物B 豚ヒレ		売上原価 1,648	152	1,800
			売上総利益 912	88	1,000
	副産物 豚革	152 ← 240 - 40 - 240 × 20%	販管費 400	40	440
			営業利益 512	48	560
			20%	20%	20%

↓
全社的な営業利益率
(通常の利益率20%)

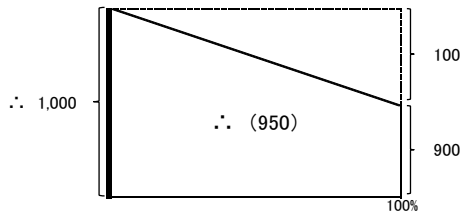
減損率が安定している場合の処理(P125～129)

★そもそも、ボックス図の意味とは？



★期首仕掛品なし のケース(P126～127)

・完成品



(1) 単価の算定

・原料費
 $220,000円 \div 1,100kg = 200円/kg$

・加工費
 $(296,760円) \div (989.2kg) = (300円/kg)$

(2) 原価の計算

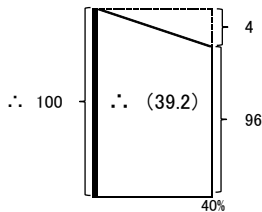
・期末仕掛品
 $200円/kg \times 100kg + (300円/kg) \times (39.2kg) = 31,760円$

・完成品
 $220,000円 + 296,760円 - 31,760円 = 485,000円$

(別解)

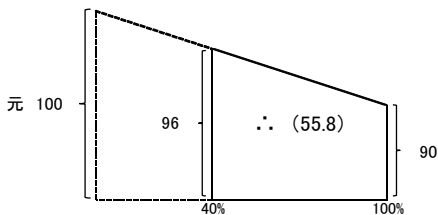
$200円/kg \times 1,000kg + (300円/kg) \times (950kg) = 485,000円$

・期末仕掛品



★期首仕掛品あり のケース(P128～129)

・期首仕掛品 ⇒ 完成品



(1) 単価の算定

・原料費
 $225,500円 \div 1,100kg = 205円/kg$

・加工費
 $(335,606円) \div (1,082.6kg) = (310円/kg)$

(2) 原価の計算

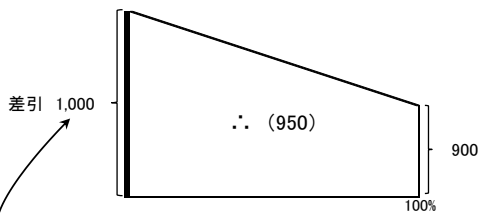
・期末仕掛品
 $205円/kg \times 100kg + (310円/kg) \times (76.8kg) = 44,308円$

・完成品
 $20,000円 + 11,760円 + 225,500円 + 335,606円 - 44,308円 = 548,558円$

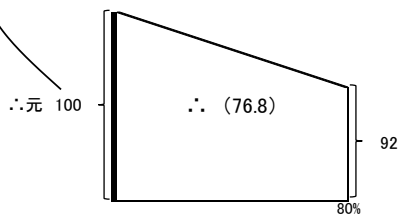
(別解)

$20,000円 + 11,760円 + 205円/kg \times 1,000kg + (310円/kg) \times (1,005.8kg) = 548,558円$

・当期投入 ⇒ 完成品



・当期投入 ⇒ 期末仕掛品



問題 6

次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 総合原価計算では、当期製造費用および期首仕掛品原価を、先入先出法などの方法により、完成品と期末仕掛品とに分割して、完成品総合原価を計算する。なお、加工費について期末仕掛品の完成品換算量を計算することが困難な場合であっても、当期の加工費総額は、すべてこれを完成品に負担させることができない。

イ. 等級別総合原価計算は、同一工程において、同種製品を連続生産するが、その製品を形状、大きさ、品位等によって等級に区別する場合に適用する。等級別総合原価計算では、各等級製品について適当な等価係数を定め、一期間における完成品の総合原価又は一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。

ウ. 工程別総合原価計算において、原料がすべて最初の工程の始点で投入され、その後の工程では、単にこれを加工するにすぎない場合には、各工程別に一期間の加工費を集計し、それに原料費を加算することにより、完成品総合原価を計算する。この方法を加工費工程別総合原価計算という。

エ. 連産品とは、同一工程において同一原料から生産される異種の製品であって、相互に主副を明確に区別できないものをいう。連産品の価額は、連産品の正常市価等を基準として定めた現価係数に基づき、一期間の総合原価を連産品にあん分して計算する。

1. アイ 2. アウ 3. アエ 4. イウ 5. イエ 6. ウエ

問題 6

次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 単純総合原価計算は、同種製品を反復連続的に生産する生産形態に適用する。単純総合原価計算にあつては、一原価計算期間に発生したすべての原価要素を集計して当期製造費用を求め、これに期首仕掛品原価を加え、この合計額を、完成品と期末仕掛品とに分割計算することにより、完成品総合原価を計算し、これを製品単位に均分して単位原価を計算する。

イ. 等級別総合原価計算は、同一工程において、同種製品を連続生産するが、その製品を形状、大きさ、品位等によって等級に区別する場合に適用する。等級別総合原価計算にあつては、各等級製品について適当な等価係数を定め、一期間における完成品の総合原価又は一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。

ウ. 組別総合原価計算は、異種製品を組別に連続生産する生産形態に適用する。組別総合原価計算にあつては、一期間の製造費用を組直接費と組間接費又は原料費と加工費とに分け、等級別総合原価計算に準じ、組直接費又は原料費は、各組の製品に賦課し、組間接費又は加工費は、適当な配賦基準により各組に配賦する。次いで一期間における組別の製造費用と期首仕掛品原価とを、当期における組別の完成品とその期末仕掛品とに分割することにより、当期における組別の完成品総合原価を計算し、これを製品単位に均分して単位原価を計算する。

エ. 個別原価計算は、種類を異にする製品を連続的に生産する生産形態に適用する。個別原価計算にあつては、特定製造指図書について個別的に直接費および間接費を集計し、製品原価は、これを当該指図書に含まれる製品の生産完了時に算定する。経営の目的とする製品の生産にさいしてのみでなく、自家用の建物、機械、工具等の製作又は修繕、試験研究、試作、仕損品の補修、仕損による代品の製作等にさいしても、これを特定指図書を発行して行なう場合は、個別原価計算の方法によってその原価を算定する。

1. アイ 2. アウ 3. アエ 4. イウ 5. イエ 6. ウエ

平成29年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 5 副産物に関する次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 副産物で、そのまま外部に売却できるものは、見積売却価額から販売費および一般管理費又は販売費、一般管理費および通常の収益の見積額を控除した額を副産物の価額とする。

イ. 副産物で、加工の上売却できるものは、加工製品の見積売却価額から加工費、販売費および一般管理費又は加工費、販売費、一般管理費および通常の利益の見積額を控除した額を副産物の価額とする。

ウ. 副産物でそのまま自家消費されるものは、これによって節約されるべき物品の見積購入価額を副産物の価額とする。

エ. 副産物で、加工の上自家消費されるものは、これによって節約されるべき物品の見積購入価額から一般管理費の見積額を控除した額を副産物の価額とする。

1. アイ 2. アウ 3. アエ 4. イウ 5. イエ 6. ウエ

平成30年第Ⅰ回短答式管理会計論

問題 5 次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に基づいて正しいものの組合せを示す番号を一つ選びなさい。(5点)

ア. 単純総合原価計算、等級別総合原価計算および組別総合原価計算は、いずれも原価集計の単位が期間投入量であることを特質とする。すなわち、いずれも継続製造指図書に基づき、一期間における投入量について総製造費用を算定し、これを期間投入量に集計することによって完成品総合原価を計算する点において共通する。

イ. 総合原価計算において、必要ある場合には、一期間における製造費用のうち、変動直接費および変動間接費のみを部門に集計して部門費を計算し、これに期首仕掛品を加えて完成品と期末仕掛品とにあん分して製品の直接原価を計算し、固定費を製品に集計しないことができる。この場合、会計年度末においては、当該会計期間に発生した固定費額は、これを期末の仕掛品および製品とに配賦する。

ウ. 総合原価計算において、製造工程が二以上の連続する工程に分けられ、工程ごとにその工程製品の総合原価を計算する場合(この方法を「工程別総合原価計算」という。)には、一工程から次工程へ振り替えられた工程製品の総合原価を、前工程費又は原料費として次工程の製造費用に加算する。この場合、工程間に振り替えられる工程製品の計算は、予定原価又は正常原価によることができる。

エ. 等級別総合原価計算は、同一工程において、同種製品を連続生産するが、その製品を形状、大きさ、品位等によって等級に区別する場合に適用する。等級別総合原価計算にあつては、各等級製品について適当な等価係数を定め、一期間における完成品の総合原価又は一期間の製造費用を等価係数に基づき各等級製品にあん分してその製品原価を計算する。

1. アイ 2. アウ 3. アエ 4. イウ 5. イエ 6. ウエ

平成31年第Ⅰ回短答式管理会計論

問題 5

次の記述のうち、我が国の「原価計算基準」に照らして正しいものの組合せとして最も適切な番号を一つ選びなさい。(5点)

- ア. 総合原価計算において仕損品が生じた場合には、その売却収入を原価計算に反映しなければならず、原価計算外の収益とすることはできない。
- イ. 工程別総合原価計算において、各工程の製造費用をもってそのまま各工程の完成品総合原価とすることがありうる。
- ウ. 総合原価計算において、期首仕掛品がない場合には、平均法、先入先出法、後入先出法による期末仕掛品原価は同一となる。
- エ. 等級別総合原価計算において、必要がある場合には、等級品の一種又は数種の価額を副産物に準じて計算し、これを一期間の総合原価から控除した額をもって他の等級品の価額とすることができる。

1. アイ 2. アウ 3. アエ 4. イウ 5. イエ 6. ウエ

平成31年第Ⅰ回短答式管理会計論

平成23年第Ⅰ回短答式管理会計論

問題5

当工場では製品Aを製造・販売し、実際総合原価計算を実施している。次の〔資料〕に基づき、通常の修正先入先出法により算定した当月完成品単位原価と、純粋先入先出法により月初仕掛品完成分と区別して算定した当月着手完成分の単位原価の差額として、正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合は、少数点以下第3位を四捨五入する。

〔資料〕

1. 生産データ

月初仕掛品	800個(0.25)
当月投入	5,200個
正常仕損品	300個(0.4)
異常仕損品	200個(0.5)
月末仕掛品	500個(0.8)
完 成 品	?個

() 内は加工進捗度を示している。

2. 原価データ

月初仕掛品原価	
直接材料費	632,000円
加 工 費	90,000円
当月製造費用	
直接材料費	4,368,000円
加 工 費	2,655,800円

3. 計算条件

- (1) 材料はすべて工程の始点で投入している。
- (2) 仕損費の処理は非度外視法による。
- (3) 仕損品はすべて当月投入分から発生し、100個当たり4,375円で売却可能であり、直接材料費から控除する。なお、異常仕損品に関しては売却価値はないものとする。
- (4) 仕損費の処理は、仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。

1. 19.32円 2. 19.83円 3. 22.00円 4. 41.43円 5. 63.61円

平成23年第Ⅱ回短答式管理会計論

- 問題 8 当工場では、連産品 X、Y、Z を生産し、更にこれらをそれぞれ加工の上販売している。次の〔資料〕に基づき、分離前の連結原価として正しい番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じた場合は円未満を四捨五入する。

〔資料〕

1. 製品別データ

	生産数量 (トン)	正常売価 (円/トン)	分離後の個別正常加工費 (円)
製品 X	(各自計算)	12,000	200,000,000
製品 Y	40,000	6,000	40,000,000
製品 Z	60,000	7,000	20,000,000

2. 製品別損益データ

(単位：円)

	製品 X	製品 Y	製品 Z
売上高	1,200,000,000	(各自計算)	(各自計算)
売上原価	(各自計算)	(各自計算)	(各自計算)
売上総利益	232,500,000	42,500,000	85,000,000

3. 計算条件

- (1) 連産品 Y、Z の個別加工費の実際額は、正常加工費と同額であったが、連産品 X の個別加工費の実際額は正常加工費よりも 20,000,000 円少なかった。
- (2) 連結原価の按分は市価基準を採用している。
- (3) 生産数量はすべて正常売価で販売済みである。

1. 1,240,000,000 円
2. 1,260,000,000 円
3. 1,290,000,000 円
4. 1,340,000,000 円
5. 1,360,000,000 円

平成24年第 I 回短答式管理会計論

- 問題 7 当工場では、等級別製品MとLを生産しており、等級別総合原価計算を実施している。
次の〔資料〕に基づき、製品Mの完成品単位原価として正しい金額を示す番号を一つ選びな
さい。

〔資料〕

1. 生産データ

	製品M	製品L
月初仕掛品	300 個 (0.7)	200 個 (0.4)
当月投入	5,300 個	5,100 個
正常仕損品	50 個	—
異常仕損品	100 個	—
月末仕掛品	500 個 (0.6)	300 個 (0.3)
当月完成品	各自計算	各自計算

()内は加工進捗度を示している。

2. 原価データ

	製品M	製品L
月初仕掛品		
直接材料費	4,500 千円	5,000 千円
加工費	15,120 千円	7,200 千円
当月製造費用		
直接材料費	165,600 千円	
加工費	912,200 千円	

3. 等価係数

	製品M	製品L
直接材料費	0.6	1
加工費	0.8	1

4. 計算条件

- (1) 材料はすべて工程の始点で投入している。
- (2) 仕掛品の評価は先入先出法による。
- (3) 仕損品はすべて当月投入分から発生している。正常仕損品は工程の終点で発生し、その見積売却可能価額は総額で1,200 千円である。異常仕損品は加工進捗度50 %時点で発生し、その売却価値はない。
- (4) 仕損費の処理は、仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。
- (5) 等級別計算は、当月製造費用を等価係数によって各製品に按分する方法による。
- (6) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入すること。

1. 91,604 円
2. 91,721 円
3. 91,844 円
4. 92,529 円
5. 92,772 円

平成24年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 8

当社は製品Xを製造販売し、累加法による工程別総合原価計算を採用している。製品Xは、第1工程と第2工程を経て完成する。第1工程では、工程始点で原料Aを、また工程を通じて平均的に原料Bを投入して加工する。第2工程では、第1工程完成品を加工するが、工程を通じて平均的に原料Cを投入して加工する。次の〔資料〕に基づき、製品Xの売上総利益として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 各工程の生産データ

	第1工程	第2工程
月初仕掛品	600個 (1/3)	600個 (2/3)
当月投入	3,400	3,200
月末仕掛品	800 (1/2)	400 (1/2)
正常仕損品	0	200
完成品	3,200個	3,200個

()内は加工進捗度を示している。

2. 月初仕掛品の原価データ

(1) 第1工程月初仕掛品原価

原料費：原料A 692,000円 原料B 250,000円

加工費：460,000円

(2) 第2工程月初仕掛品原価

原料費：原料C 40,000円

加工費：520,000円

前工程費：2,770,000円

3. 当月の原価データ

原料費：原料A 4,012,000円 原料B 4,250,000円 原料C 320,000円

加工費：第1工程 7,820,000円 第2工程 4,160,000円

4. 製品Xの販売データなど

月初在庫量 1,000個 月初製品の単位当たり原価 6,500円/個

当月販売量 3,400個 販売単価 9,000円/個

5. 計算条件

(1) 各工程の完成品と月末仕掛品への原価配分および製品の庫出単価の計算には先入先出法を用いる。

(2) 正常仕損は第2工程の終点で発生する。仕損費は適切な方法で良品に負担させる。

(3) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入しなさい。

1. 8,530,000円 2. 8,545,000円 3. 8,695,000円
4. 8,857,125円 5. 8,873,125円

平成25年第 I 回短答式管理会計論

問題 7

当工場では、まず連産品A・Bが生産され、工程の終点で分離後、各々追加加工が施され連産品Aは製品Aとして、連産品Bは製品Bとして全て完成品となる。追加加工工程において、月初仕掛品はない。次の〔資料〕に基づき、実際原価計算による当月の製品Bの完成品総合原価として正しい金額を示す番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 連産品の生産データ

月 初 仕 掛 品	10 kg (0.2)
当 月 投 入	300 kg
仕 損 品	各自計算
月 末 仕 掛 品	50 kg (0.4)
当 月 完 成	連産品A：100 kg 連産品B：125 kg

(注) (1) ()内は加工進捗度を示している。

(2) 仕損品のうち、25 kg は正常仕損品である。

2. 連産品の原価データ

	原 料 費	加 工 費
月 初 仕 掛 品	100,000 円	30,000 円
当 月 製 造 費 用	2,700,000 円	3,892,000 円

3. 製品データ

	分離後の正常個別費	分離後の実際個別費	販売単価
製品A	250,000 円	250,000 円	20,000 円/kg
製品B	500,000 円	450,000 円	30,000 円/kg

(注)分離後追加加工による各製品生産量の変化はない。

4. 計算条件

- (1) 原料はすべて工程の始点で投入している。
- (2) 仕掛品の評価方法は先入先出法による。
- (3) 仕損品は当月投入分からのみ工程の終点で発生し、仕損品の評価額はゼロである。正常仕損費の計算は非度外視法によるものとし、その処理は仕損品の発生時点と仕掛品の進捗度により判断する。なお、異常仕損費は正常仕損費を負担しない。
- (4) 連結原価は正常市価基準によって連産品に配賦する。
- (5) 計算過程で端数が生じる場合は円未満を四捨五入する。

1. 3,482,632 円 2. 3,821,550 円 3. 4,195,300 円
4. 4,270,050 円 5. 4,344,800 円

平成25年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 6

当工場では、単一の化学製品を連続する二つの製造工程において製造し、累加法による工程別総合原価計算を実施している。第一工程の始点で原料を投入し、これを加工し完成させ、全量を第二工程に振り替えている。第二工程では、前工程完成品と同量の溶液を工程の始点で加えて加工し製品を完成させている。次の〔資料〕に基づき、第二工程の完成品原価として適切な番号を一つ選びなさい。

〔資料〕

1. 各工程の当月生産データ

	第一工程	第二工程
月初仕掛品	3,500 ㍻ (0.2)	3,000 ㍻ (0.8)
当月投入	49,500 ㍻	各自計算
減損	500 ㍻	—
月末仕掛品	2,500 ㍻ (0.6)	4,000 ㍻ (0.3)
完成品	各自計算	各自計算

(注) ① ()内は加工進捗度を示している。

② 第二工程において追加投入された原料分だけ全体の数量は増加する。

2. 各工程の当月原価データ(一部抜粋)

	第一工程	第二工程
月初仕掛品		
原料費	4,095 千円	1,350 千円
直接労務費	710 千円	1,600 千円
前工程費	—	4,050 千円
当月製造費用		
原料費	58,905 千円	44,850 千円
直接労務費	50,790 千円	78,560 千円

3. その他の計算条件

- (1) 仕掛品の評価は平均法を採用している。
- (2) 第一工程において蒸発によって工程全体を通じて平均的に歩減りが生じているが、その歩留率は正常である。
- (3) 減損の処理は、わが国の「原価計算基準」に示される方法を採用している。
- (4) 製造間接費は直接労務費の 40 %を予定配賦している。
- (5) 計算過程で端数が生じる場合は、千円未満を四捨五入する。

1. 264,906 千円
2. 284,130 千円
3. 308,596 千円
4. 319,220 千円
5. 331,220 千円

平成25年第Ⅱ回短答式管理会計論

平成26年第 I 回短答式管理会計論

問題 7

当工場では、等級別製品 A と B を製造しており、等級別総合原価計算を実施している。材料 α は工程の始点で投入し、材料 β は工程の加工費進捗度 60 % の時点から終点まで平均的に追加投入し、これを加工し完成させている。なお、材料 β の追加投入による生産量の増量はない。次の〔資料〕に基づき、製品 A の当月完成品総合原価として適切な番号を一つ選びなさい。(6 点)

〔資料〕

1. 生産データ

	製品 A	製品 B
月初仕掛品	60 個 (0.5)	100 個 (0.7)
当月投入	各自計算	各自計算
正常仕損品	20 個	—
月末仕掛品	100 個 (0.5)	200 個 (0.8)
当月完成品	3,000 個	2,000 個

(注) ① () 内は加工費進捗度を示している。

② 正常仕損はすべて当月投入分から発生し、工程の終点の検査ポイントで発見された。

2. 原価データ

		製品 A	製品 B
月 初 仕 掛 品	直接材料費 α	7,560 千円	21,000 千円
	直接材料費 β	—	10,250 千円
	加 工 費	6,720 千円	19,600 千円
当 月 製造費用	直接材料費 α	787,200 千円	
	直接材料費 β	1,554,800 千円	
	加 工 費	1,356,600 千円	

3. 等価係数

	製品 A	製品 B
直接材料費 α , 直接材料費 β	0.6	1
加 工 費	0.8	1

4. 計算条件

- (1) 仕掛品の評価は先入先出法による。
- (2) 仕損品の売却価値はない。仕損費の処理は、仕損品の発生時点と仕掛品の加工費進捗度により判断する。
- (3) 当月製造費用は等価係数によって各製品に按分する。
- (4) 計算過程で端数が生じる場合は、千円未満を四捨五入する。

1. 1,756,339 千円
2. 1,799,306 千円
3. 1,811,880 千円
4. 1,855,287 千円
5. 1,899,159 千円

平成27年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 6

当社は親会社より無償支給された原料を、すべて工程の始点で投入し部品Aを生産している。下記の〔資料〕に基づいて、ア～エの記述のうち正しいものの組合せを示す番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合は、小数点第2位を四捨五入する。(7点)

〔資料〕

当月投入原料	14,500 kg	
月 末 仕 掛 品	7,500	(加工費進捗度 40 %)
[B]	<u>1,000</u>	
完 成 品 A	<u>6,000</u> kg	
当月加工費	79,515,000 円	

- ア. Bが正常減損で、工程の始点から終点に至るまで平均的に発生した場合、非度外視法によって計算した月末仕掛品原価は26,505,000円である。
- イ. Bが正常減損で、工程の始点から終点に至るまで平均的に発生した場合、非度外視法によって計算した完成品総合原価は52,080,000円である。
- ウ. Bが完成品Aとともに工程の終点で分離される連産品であり、親会社は完成品Aを1kg当たり8,400円、完成品Bを1kg当たり12,600円で買い取る場合、完成品Aの完成品総合原価は44,528,400円である。
- エ. Bが完成品Aとともに工程の終点で分離される連産品であり、親会社は完成品Aを1kg当たり8,400円、完成品Bを1kg当たり12,600円で買い取る場合、完成品Bの完成品総合原価は11,319,000円である。

1. アイ 2. アウ 3. アエ 4. イウ 5. イエ 6. ウエ

平成27年第Ⅱ回短答式管理会計論

平成30年第Ⅱ回短答式管理会計論

問題 6

当工場では、等級製品Aと等級製品Bとを生産し、実際等級別総合原価計算を採用している。次の〔資料〕に基づき、等級製品Bの原料費および加工費の等価係数の数値の組合せとして最も適切なものの番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合、計算途中では四捨五入せず、最終数値の円未満を四捨五入すること。(8点)

〔資料〕

1. 生産データ

(単位：個)

	等級製品A	等級製品B
月初仕掛品	20,000(0.25)	10,000(0.75)
当月投入	180,000	140,000
正常仕損	500	—
月末仕掛品	24,500(0.5)	20,000(0.2)
完成品	175,000	130,000

(注) ()内の数値は、加工費進捗度を示している。

2. 原価データ

(単位：円)

	等級製品A	等級製品B	合 計
月初仕掛品			
原料費	1,247,500	492,000	1,739,500
加工費	215,000	258,000	473,000
計	1,462,500	750,000	2,212,500
当月製造費用			
原料費	各自算定	各自算定	各自算定
加工費	各自算定	各自算定	各自算定
完成品			
原料費	9,800,000	5,772,000	15,572,000
加工費	7,035,000	3,688,000	10,723,000
計	16,835,000	9,460,000	26,295,000

3. 等価係数(等級製品Aに対する比率)

	等級製品A	等級製品B
原料費	1	各自算定
加工費	1	各自算定

4. 計算条件

- (1) 原料は工程の始点で投入され、等価係数は原料費と加工費とに区分している。
- (2) 完成品と月末仕掛品への製造原価の按分は先入先出法によっている。
- (3) 正常仕損は、工程の終点で当月投入分のみから発生し、処分価額はない。

	原料費の等価係数	加工費の等価係数
1.	0.6	0.6
2.	0.6	0.7
3.	0.7	0.5
4.	0.7	0.8
5.	0.8	0.6
6.	0.8	0.7

問題 6

当工場はX年3月に完成し、本稼働を開始した。当工場は単一製品を連続する二つの製造工程において製造し、累加法による工程別総合原価計算を行っている。第一工程の始点で原料を投入し、これを加工して完成する中間製品の全量を第二工程に振り替えた後、第二工程で追加加工を行い、最終製品を生産している。

次の〔資料〕に基づき、X年3月の最終製品の完成品単位原価として最も適切なものの番号を一つ選びなさい。なお、計算過程で端数が生じる場合、計算途中では四捨五入せず、最終数値の千円未満を四捨五入すること。(8点)

〔資料〕

1. X年3月の生産状況(製造日報から抜粋)

3月1日：第一工程に原料10,000 kgを投入し、加工開始。

3月4日：原料投入量の10%に相当する仕損が発生した。仕損の加工費進捗度は20%。予期した仕損ではなく、原因は不明。仕損品は全量廃棄した。

3月5日：仕損の発生原因は操業開始に伴う一時的な電源トラブルによるものであることが判明したため、発生した仕損は異常仕損として扱う。

3月14日：3月4日以降に仕損は発生していない。再発防止のため第一工程の電源装置を改修すべく、第一工程の生産を本日から3月末まで止めることとした。本日時点で完成している中間製品を第二工程に振り替えた。第一工程に残留する仕掛品は3,000 kg、加工費進捗度は60%。

3月15日：第二工程での製造開始。予期せぬトラブルによる損失を最小化するため、三つのバッチに分けて第二工程の製造を行うこととした。第一バッチ、第二バッチ、第三バッチの中間製品投入量は、1：2：3の比率とした。

3月16日：第二工程では、減損が発生している。工程を通じて加工進捗に応じて発生し、工程終点では中間製品投入量の10%に達する予定。工程の特性に応じた減損であり、生産計画にも反映済みであるため、正常減損として扱う。

3月31日：第一バッチ、第二バッチは完成したが、第三バッチは加工費進捗度80%で仕掛中。第二工程の減損は予定どおりの発生状況であり、仕損は発生していない。

2. 当月の原価データ

	第一工程	第二工程
原料費	260,000 千円	—
加工費	1,000,000 千円	2,061,600 千円

3. 計算条件

正常減損は、バッチ毎に加工費進捗度に基づいて完成品と仕掛品へ負担させることとする。

1. 529 千円 2. 559 千円 3. 579 千円 4. 588 千円 5. 590 千円

問題 6

正解

4

難易度

A

【出題内容】

理論（正誤） 総合原価計算

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

ア. 誤

加工費について期末仕掛品の完成品換算量を計算することが困難な場合、当期の加工費総額は、すべてこれを完成品に負担させることができる。（基準24(2)4) P108

イ. 正

（基準22） P143、147

ウ. 正

（基準26） P134

エ. 誤

連産品の価額は、連産品の正常市価等を基準として定めた等価係数に基づき、一期間の総合原価を連産品にあん分して計算する。（基準29） P153

以上より、正しい記述はイ、ウであり、正解は4となる。

問題 6

正解

1

難易度

A

【出題内容】

理論（正誤） 個別原価計算，総合原価計算

【解 説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

ア. 正

(基準21) *P84*

イ. 正

(基準22) *P143, 147*

ウ. 誤

組別総合原価計算は，異種製品を組別に連続生産する生産形態に適用する。組別総合原価計算にあつては，一期間の製造費用を組直接費と組間接費又は原料費と加工費とに分け，個別原価計算に準じ，組直接費又は原料費は，各組の製品に賦課し，組間接費又は加工費は，適当な配賦基準により各組に配賦する。(基準23) *P142*

エ. 誤

個別原価計算は，種類を異にする製品を個別的に生産する生産形態に適用する。(基準31) *P84, 86*

以上より，正しい記述はア，イであり，正解は1となる。

問題 5

正解

4

難易度

A

【出題内容】

理論（正誤） 総合原価計算（副産物の評価）

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

ア. 誤

副産物で、そのまま外部に売却できるものは、見積売却価額から販売費および一般管理費又は販売費、一般管理費および通常の利益の見積額を控除した額を副産物の価額とする。

（基準28(1)） P160

イ. 正

（基準28(2)） P160

ウ. 正

（基準28(3)） P160

エ. 誤

副産物で、加工の上自家消費されるものは、これによって節約されるべき物品の見積購入価額から加工費の見積額を控除した額を副産物の価額とする。（基準28(4)） P160

以上より、正しいものはイウであることから、正解は4となる。

問題 5

正解

6

難易度

A

【出題内容】

理論（正誤） 総合原価計算

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

ア. 誤

単純総合原価計算、等級別総合原価計算および組別総合原価計算は、いずれも原価集計の単位が期間生産量であることを特質とする。すなわち、いずれも継続製造指図書に基づき、一期間における生産量について総製造費用を算定し、これを期間生産量に分割負担させることによって完成品総合原価を計算する点において共通する。（基準24） *p104*

イ. 誤

会計年度末においては、当該会計期間に発生した固定費額は、これを期末の仕掛品および製品と当年度の売上品とに配賦する。（基準30） *p236*

ウ. 正

（基準25） *p136, 137*

エ. 正

（基準22） *p143, 147*

以上より、正しい記述はウ、エであり、正解は6となる。

↓ 「期間投入量」としても、文章の意味が通るように思えるかも知れないが、
「原価集計単位」とは、あくまでも、原価を集計する「器」のことであり、
そのように考えると、「インプット」を表す「期間投入量」ではなく、
「アウトプット」を表す「期間生産量」が適切である。

問題 5

正解

4

難易度

A

【出題内容】

理論（正誤） 総合原価計算

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

ア. 誤

軽微な仕損品は、これを売却して得た収入を、原価計算外の収益とすることができる。

(基準28) *p160. 同脚注1*

イ. 正

(基準24(2)6) *p180 無視法*

ウ. 正 *p105. 自分で数値例を作って考えてみるという。*

エ. 誤

連産品の原価計算において、必要ある場合には、連産品の一種又は数種の価額を副産物に準じて計算し、これを一期間の総合原価から控除した額をもって他の連産品の価額とすることができる。(基準29) *p152*

以上より、正しい記述は、イ、ウであり、正解は4となる。

問題5

正解

1

難易度

B

【出題内容】

総合原価計算（純粋先入先出法、非度外視法）

【解 説】

やや手数を要するものの、基本的な問題であるため、正解していただきたかった。

1. 修正先入先出法

(1) 完成品総合原価の計算

直接材料費 修正FIFO				加工費 修正FIFO			
月初	800個	完成	5,000個	月初	200個	完成	5,000個
	632,000円		4,160,000円		90,000円		2,442,000円
当月	5,200個		(差額)	当月	5,420個		(差額)
	4,368,000円	正仕	300個		2,655,800円	正仕	120個
			252,000円				58,800円
	(@840円)	異仕	200個		(@490円)	異仕	100個
			168,000円				49,000円
		月末	500個			月末	400個
			420,000円				196,000円

非度外
直接材料費分と
加工費分を
足す!!

正常仕損費			
合計	4,900個	完成	*1) 4,200個
			255,150円
*2) 297,675円		異仕	200個
			12,150円
(@60.75円)		月末	500個
P130			30,375円

*1) 完成5,000個－月初800個

*2) 直接材料費252,000円－評価額*3) 13,125円
＋加工費58,800円

*3) 評価額(4,375円÷100個)×正常仕損量300個

仕損を見たら「評価額」!
P122

完成品総合原価：直接材料費4,160,000円＋加工費2,442,000円＋正常仕損費255,150円

=6,857,150円

(2) 完成品単位原価の計算

完成品総合原価6,857,150円÷完成品5,000個＝1,371.43円

問題 8

正解

2

難易度

A

【出題内容】

連産品の原価計算（NRV法，逆進推定）

【解 説】

製品Xの連結原価按分額を算定し、逆進して分離前の連結原価を算定していただきたかった。

1. 製品Xの連結原価按分額の計算（単位：円）

	製品X
売上高	1,200,000,000
売上原価	
連結原価按分額	∴ 787,500,000
個別実際加工費	*1) 180,000,000
売上総利益	232,500,000

差額で算定(逆進)

*1) 個別正常加工費200,000,000円－20,000,000円

2. 分離前の連結原価の計算（(1)，(2)は解く順番を示す。）

連結原価

1,600,000,000円	X *1) 1,000,000,000円
↓	↑ (1) 0.7875
×0.7875	787,500,000円
↓	Y *2) 200,000,000円
(2) 1,260,000,000円	Z *3) 400,000,000円

*1) 売上高1,200,000,000円

－個別正常加工費200,000,000円

*2) 正常売価6,000円×生産数量40,000トン

－個別正常加工費40,000,000円

*3) 正常売価7,000円×生産数量60,000トン

－個別正常加工費20,000,000円

以上より、正解は2となる。

資料3.(2)には、「市価基準」と書かれているが、「追加加工があり、かつ、分離点における正常市価が存在しない場合」(P153)に該当することに気付きたい。
 テキスト的には、上記の計算方法は、「NRV法」(P153)という呼称ではあるが、基準29原文を読むと、この方法も広い意味では「市価基準」と言えるであろう。
 (原文の「～その正常市価とみなし、～」という文言から。)

問題7 正解 4

難易度 A

【出題内容】

計算 総合原価計算（等級別総合原価計算（第3法）, 正常仕損と異常仕損） 原価計算 P158

【解説】

平易な問題であるため、確実に正答したい。

1. 直接材料費の計算

当月製造費用の按分		製品M	
積数合計 8,280個	M当積 ※) 3,180個	月初 300個	完成 4,950個
165,600千円	63,600千円	4,500千円	60,900千円
(@20千円)	L当積 5,100個	当月 5,300個	(差額)
	102,000千円	63,600千円	正損 50個
		(@12千円)	異損 100個
			1,200千円
			月末 500個
			6,000千円

製品L	
月初 200個	完成 5,000個
当月 5,100個	
	月末 300個

※) 製品M当月投入5,300個×等価係数0.6

2. 加工費の計算

当月製造費用の按分		製品M	
積数合計 9,122個	M当積 ※) 4,112個	月初 210個	完成 4,950個
912,200千円	411,200千円	15,120千円	398,320千円
(@100千円)	L当積 5,010個	当月 5,140個	(差額)
	501,000千円	411,200千円	正損 50個
		(@80千円)	異損 50個
			4,000千円
			月末 300個
			24,000千円

製品L	
月初 80個	完成 5,000個
当月 5,010個	
	月末 90個

※) 製品M当月加工5,140個×等価係数0.8

3. 製品Mの完成品単位原価（選択肢より、最終数値で円未満を四捨五入している。）

(直接材料費60,900千円+加工費398,320千円-正常仕損品評価額1,200千円)÷完成品量4,950個
=92,529.2...円 → 92,529円

以上より、正解は4となる。

短答テクニック

仕損品を見たら評価額を思い！
評価額も引き忘れた場合、1,200,000円÷4,950≒242円のアズレ
が生まれる。選択肢間で242円のアズレの粗み合わせは、4と5。
⇒5が引き忘れ。よって、4!

P122

4-8

問題 8

正解

1

難易度

A

【出題内容】

計算 総合原価計算（累加法、仕損の処理、追加材料の投入）

生産量が変化しない (P109、110~111)

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

P110~111のパターンであると考えられる。
(物量単位1つ)

1. 第1工程の計算

原料A

FIFO

月初	600個	完成	3,200個
	692,000円		3,760,000円
当月	3,400個		
	4,012,000円	月末	800個
	(@1,180円) →		944,000円

原料B・加工費

FIFO

月初	200個	完成	3,200個
B :	250,000円		
加 :	460,000円		11,360,000円
当月	3,400個		
B :	4,250,000円		
加 :	7,820,000円		
計 :	12,070,000円	月末	400個
	(@3,550円) →		1,420,000円

2. 第2工程の計算

「正常仕損は第2工程の終点で発生する。仕損費は適切な方法で良品に負担させる」との指示より、正常仕損費は完成品のみに負担させる。

P117、118

前工程費

FIFO

月初	600個	完成	3,200個
	2,770,000円		16,000,000円
当月	3,200個		
		正損	200個
	15,120,000円	月末	400個
	(@4,725円) →		1,890,000円

原料C・加工費

FIFO

月初	400個	完成	3,200個
C :	40,000円		
加 :	520,000円		4,760,000円
当月	3,200個		
C :	320,000円		
加 :	4,160,000円		
計 :	4,480,000円	月末	200個
	(@1,400円) →		280,000円

3. 売上総利益の計算

製品

FIFO

月初	1,000個	販売	3,400個
*1) 6,500,000円			22,070,000円
完成	3,200個		
	20,760,000円	月末	800個
	(@6,487.5円) →		5,190,000円

*1) 単位当たり原価6,500円/個×在庫量1,000個

売上総利益：売上高*2) 30,600,000円－売上原価22,070,000円＝8,530,000円

*2) 販売単価9,000円/個×販売量3,400個

以上より、正解は1となる。

問題 7

正解

3

難易度

A

【出題内容】

計算 連産品の原価計算（非度外視法，先入先出法，異常仕損，NRV法）

【解説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

1. 連結原価の計算

仕損品は終点発生であり，また，「異常仕損費は正常仕損費を負担しない」との指示より，正常仕損費は完成品のみが負担する。P117④-i、P131④

原料費 FIFO				加工費 FIFO			
月初	10kg	完成	*) 225kg	月初	2kg	完成	*) 225kg
	100,000円		∴ 2,035,000円		30,000円		∴ 3,152,000円
当月	300kg			当月	278kg		
		正損	25kg			正損	25kg
			225,000円				350,000円
	2,700,000円	異損	∴ 10kg		3,892,000円	異損	10kg
	(@9,000円)		90,000円		(@14,000円)		140,000円
		月末	50kg			月末	20kg
			450,000円				280,000円

正常仕損費				*) 連産品 A 100kg + 連産品 B 125kg
合計	225kg	完成	*) 225kg	
	225,000円		575,000円	
	350,000円	月末	0kg	
	<u>575,000円</u>		0円	

連結原価：原料費2,035,000円＋加工費3,152,000円＋正常仕損費575,000円＝5,762,000円

2. 連産品Bの連結原価按分額の計算（正常市価基準）

合計 5,000,000円	A *1) 1,750,000円	*1) 販売単価20,000円×完成100kg－正常250,000円
5,762,000円	B *2) 3,250,000円	*2) 販売単価30,000円×完成125kg－正常500,000円
(@1.1524円)	3,745,300円	

按分は、正常市価および
正常個別加工費を利用する。(P153)

3. 製品Bの完成品総合原価の計算

連産品Bの連結原価按分額3,745,300円＋実際個別費450,000円＝4,195,300円

以上より，正解は3となる。

製品原価の計算にあたっては、
実際個別加工費を加算する。(P153脚注2)

問題 6

正解

2

難易度

A

【出題内容】

計算 工程別総合原価計算（累加法、減損の処理、追加材料の投入）

生産量が増加 (P109, 112~113)

【解 説】

平易な問題であるため、確実に正答して欲しかった。

平均発生だが、度外視法であり、原料費の負担割合は、1:1となる(P119(1))。

1. 第一工程の計算

原料費		加工費	
月初+当月	完成 *1) 50,000 ℓ	月初+当月	完成 50,000 ℓ
59,000 ℓ 52,500 ℓ	60,000千円	51,750 ℓ 51,500 ℓ	70,000千円
初 4,095千円	減損 500 ℓ	初 *2) 994千円	減損 250 ℓ
当 58,905千円		当 *3) 71,106千円	
計 63,000千円	月末 2,500 ℓ	計 72,100千円	月末 1,500 ℓ
(@1.2千円)		(@1.4千円)	

*1) 月初仕掛品3,500 ℓ + 当月投入49,500 ℓ - 減損500 ℓ - 月末仕掛品2,500 ℓ

*2) 月初仕掛品直接労務費710千円 × (1 + 製造間接費予定配賦分40%)

*3) 当月製造費用直接労務費50,790千円 × (1 + 製造間接費予定配賦分40%)

2. 第二工程の計算

*1 前工程費+原料費		*2 加工費	
月初+当月	完成 *2) 99,000 ℓ	月初+当月	完成 99,000 ℓ
*1) 103,000 ℓ	173,250千円	100,200 ℓ	110,880千円
初 *3) 5,400千円		初 *5) 2,240千円	
当 *4) 174,850千円		当 *6) 109,984千円	
計 180,250千円	月末 4,000 ℓ	計 112,224千円	月末 1,200 ℓ
(@1.75千円)		(@1.12千円)	

*1) 月初仕掛品3,000 ℓ + 当月投入(前工程完成品50,000 ℓ + 追加投入原料50,000 ℓ)

*2) (月初仕掛品+当月投入)103,000 ℓ - 月末仕掛品4,000 ℓ

*3) 月初仕掛品原料費1,350千円 + 月初仕掛品前工程費4,050千円

*4) 当月製造費用原料費44,850千円 + 当月投入前工程完成品原価(60,000千円 + 70,000千円)

*5) 月初仕掛品直接労務費1,600千円 × (1 + 製造間接費予定配賦分40%)

*6) 当月製造費用直接労務費78,560千円 × (1 + 製造間接費予定配賦分40%)

第二工程の完成品原価：(前工程費+原料費)173,250千円 + 加工費110,880千円 = 284,130千円

以上より、正解は2となる。

*1) 第一工程完了品5,150 ℓ、第二工程始点投入溶液5,150 ℓに分割(P112)して解くのが
筋であるが、1:1であり、分割して計算しても、分割せずに計算しても同じ結果になるため、
分割せずに解いている。
*2) 第二工程始点投入材料(上記*1)の2種材の合計) × 加工進捗率にて計算。(P112) 4-11

問題 7

正解

3

難易度

B

【出題内容】

計算 総合原価計算（等級別・第3法、正常仕損の処理）

【解説】

直接材料費βの按分に注意して、何とか正答して欲しかった。

1. 直接材料費αの計算

製品A				製品B			
月初	60個	完成	3,000個	月初	100個	完成	2,000個
	7,560千円		362,760千円				
			(差額)				
当月	∴ 3,060個	正損	20個	当月	∴ 2,100個		
	367,200千円	月末	100個			月末	200個
	(@120千円)		12,000千円				

直接材料費α 787,200千円を、A(3,060個×0.6)とB(2,100個×1)に按分

= 押し返す!

2. 直接材料費βの計算

製品A				製品B			
月初	*1) 0個	完成	3,000個	月初	*2) 25個	完成	2,000個
	— 千円		724,800千円				
			(差額)				
当月	∴ 3,020個	正損	20個	当月	∴ 2,075個		
	724,800千円	月末	0個			月末	100個
			— 千円				

直接材料費β 1,554,800千円を、A(3,020個×0.6)とB(2,075個×1)に按分

= 押し返す!

*1) 月初加工進捗度0.5<材料β投入始点0.6より、直接材料費β進捗度は0である。P110~111

*2) (月初加工進捗度0.7-材料β投入始点0.6)÷(1-材料β投入始点0.6)より、直接材料費β進捗度は0.25である。P110~111

3. 加工費の計算

製品A				製品B			
月初	30個	完成	3,000個	月初	70個	完成	2,000個
	6,720千円		724,320千円				
			(差額)				
当月	∴ 3,040個	正損	20個	当月	∴ 2,090個		
	729,600千円	月末	50個			月末	160個
	(@240千円)		12,000千円				

加工費1,356,600千円を、A(3,040個×0.8)とB(2,090個×1)に按分

= 押し返す!

合計：1,811,880千円

問題 6

正解

2

難易度

A

【出題内容】

計算 総合原価計算（非度外視法，連産品（市価法））

【解 説】

平易な問題であるため，確実に正答して欲しかった。

1. Bを正常減損（平均発生）として処理する場合 (7, 1) P117⑧

加工費				正常減損費			
当月	9,500kg	完成	6,000kg	当月	9,000kg	完成	6,000kg
			50,220,000円				2,790,000円
		正損	500kg		4,185,000円	月末	3,000kg
			4,185,000円		(@465円)		1,395,000円
		月末	3,000kg				
			25,110,000円				

完成品総合原価：加工費50,220,000円＋正常減損費2,790,000円＝53,010,000円

月末仕掛品原価：加工費25,110,000円＋正常減損費1,395,000円＝26,505,000円

2. 完成品A，Bを連産品として処理する場合 (7, 1) P152

連結原価の把握				連結原価の按分（市価法）			
加工費							
当月	10,000kg	完成	7,000kg	完成	63,000,000円	A *1)	50,400,000円
			55,660,500円				44,528,400円
		月末	3,000kg		55,660,500円	B *2)	12,600,000円
					(@0.8835円)		11,132,100円

*1) A買取価格 8,400円/kg×完成品A6,000kg

*2) B買取価格12,600円/kg×完成品B1,000kg

3. 正誤判断

ア. 正しい。

イ. 誤り。 Bが正常減損で，工程の始点から終点に至るまで平均的に発生した場合，非度外視法によって計算した完成品原価は53,010,000円である。

ウ. 正しい。

エ. 誤り。 Bが完成品Aとともに工程の終点で分離される連産品であり，親会社は完成品Aを1kg当たり8,400円，完成品Bを1kg当たり12,600円で買い取る場合，完成品Bの完成品総合原価は11,132,100円である。

以上より，正しい記述はア，ウであり，正解は2となる。

問題 6

正解

6

難易度

B

【出題内容】

計算 総合原価計算（等級別、正常仕損がある場合の処理（第3法））

【解説】

第2法または第3法に関する指示が存在しないため、戸惑った受講生も多いであろう。しかし、比較的状况を整理しやすい第3法から検討すれば正答を導くことが可能であるため、諦めずに何とか正答して欲しかった。なお、第3法の場合、等価係数は、各等級製品の当月投入単位原価の比率から求めることができるが、解説では当月製造費用の按分までを示している。①②③の流れで解く。（逆進問題）

1. 原料費の計算

当月製造費用の按分

完成品と月末仕掛品への按分

完成品原価

PI47
「押し返す解き方」の
流れをイメージ。
本問は逆進。

原料費	
A	9,900,000円
B	6,160,000円

製品A（原料費） FIFO			
月初	20,000個	初→完	20,000個
	1,247,500円		1,247,500円 ←
当月	180,000個	当→完	155,000個
		当→仕	500個
			8,552,500円 ← ①
	9,900,000円		(*) @55円 ②
	(@55円)	月末	24,500個

完成品	175,000個
	9,800,000円

差額で算定
9,800,000 - 1,247,500

製品B（原料費） FIFO			
月初	10,000個	初→完	10,000個
	492,000円		492,000円 ←
当月	140,000個	当→完	120,000個
			5,280,000円 ← ①
	6,160,000円		(@44円) ②
	(@44円)	月末	20,000個

完成品	130,000個
	5,772,000円

差額で算定

*) $\frac{\text{完成品に含まれる当月製造費用8,552,500円}}{\text{当月投入完成品155,000個} + \text{正常仕損品500個}}$

製品A (@55円) : 製品B (@44円) = 製品A (1) : 製品B (0.8)

2. 加工費の計算

当月製造費用の按分

完成品と月末仕掛品への按分

完成品原価

1147
押込可解方?
流れをイメージ。
本問は逆進。

製品A (加工費) FIFO		製品B (加工費) FIFO	
月初 5,000個 215,000円	初→完 5,000個 215,000円 ← ①	月初 7,500個 258,000円	初→完 7,500個 258,000円 ← ①
当月 182,750個	当→完 170,000個 当→仕 500個	当月 126,500個	当→完 122,500個
7,310,000円 (@40円) ← ③	6,820,000円 ← ② (*) @40円	3,542,000円 (@28円) ← ③	3,430,000円 ← ② (@28円)
	月末 12,250個		月末 4,000個

差額で算定

差額で算定

完成品に含まれる当月製造費用6,820,000円

*) 当月投入完成品170,000個 + 正常仕損品500個

製品A (@40円) : 製品B (@28円) = 製品A (1) : 製品B (0.7)

問題 6

正解

5

難易度

B

【出題内容】

計算 総合原価計算 (減損率が安定している場合の処理, 異常仕損費, 累加法)

P125~129
製造日報(3月16日)の「工程を通じて加工進捗に応じて発生」より。

【解説】

1. 第一工程

原料費			加工費		
合計	10,000kg	完成 ∴ 6,000kg	合計 ∴ 8,000kg	完成	6,000kg
		156,000千円			750,000千円
260,000千円			1,000,000千円		
(@26千円)		異損 1,000kg	(@125千円)	異損	200kg
		月末 3,000kg		月末	1,800kg

P130

P130

第一工程完成品原価：原料費156,000千円＋加工費750,000千円＝906,000千円

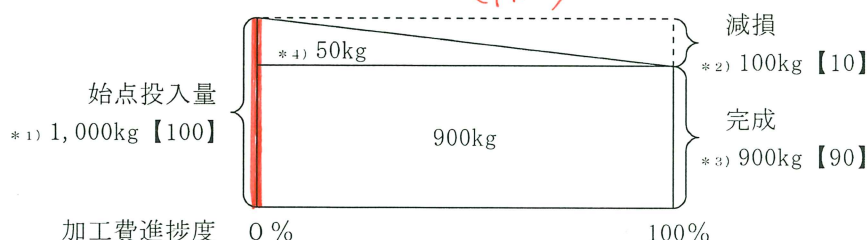
2. 第二工程

(1) 減損量の区分把握および当月加工量の計算

本問の生産状況を図で示すと、以下ようになる(【 】内の数値は、始点投入量100に対する減損分と歩留分を示す)。

ここには記載されていないが、下書き用紙には、まず、バースパターンの台形を書く。そのうえで①②③を書く。(P125)

① 完成品 (第一バッチ)



$$*1) \text{ 第一工程完成品 } 6,000\text{kg} \times \frac{\text{第一 } 1}{(\text{第一 } 1 + \text{第二 } 2 + \text{第三 } 3)}$$

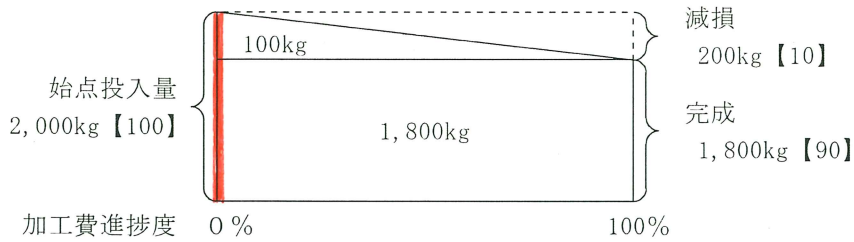
$$*2) \text{ 始点投入量 } 1,000\text{kg} \times \frac{【10】}{【100】}$$

$$*3) \text{ 始点投入量 } 1,000\text{kg} \times \frac{【90】}{【100】}$$

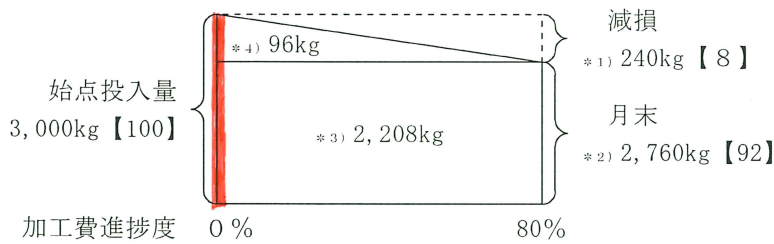
$$*4) \text{ 減損量 } 100\text{kg} \times \text{加工費進捗度 } 100\% \times 1/2$$

製造日報の記述から、総合原価計算のためのデータを抽出する、見慣れない形式の問題である。
(しかし、P85(ロット(バッチ)生産に対する製品別計算)の知識を活かし、
「総合原価計算では、バッチ(製造指図書)の違いは問題とならない。
つまり、それぞれの製造指図書に原価を集計するのではなく、
期間生産量に原価を集計する!」と考えて解いてほしい。

② 完成品 (第二バッチ)



③ 月末仕掛品 (第三バッチ)



$$*1) \text{ 始点投入量 } 3,000\text{kg} \times \frac{【8】}{【100】}$$

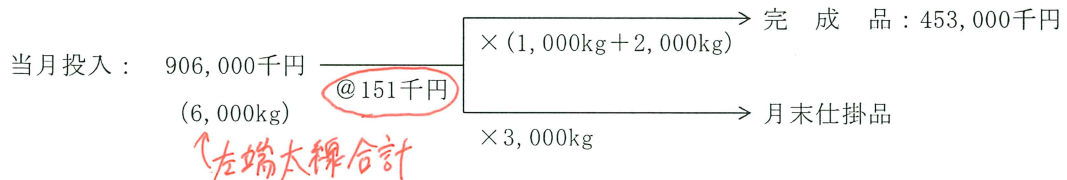
$$*2) \text{ 始点投入量 } 3,000\text{kg} \times \frac{【92】}{【100】}$$

$$*3) \text{ 月末仕掛品量 } 2,760\text{kg} \times \text{加工費進捗度 } 80\%$$

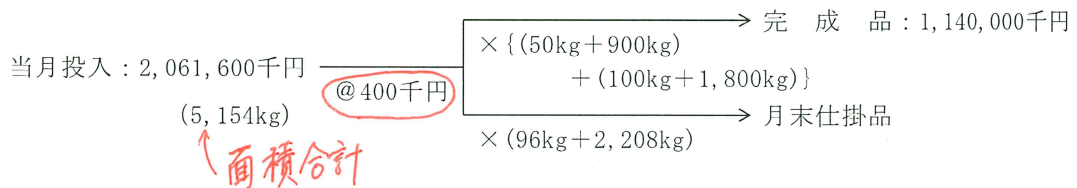
$$*4) \text{ 減損量 } 240\text{kg} \times \text{加工費進捗度 } 80\% \times 1/2$$

PI26
なお(資料)3より、非度外視法
であることが分かる

(2) 前工程費の配分



(3) 加工費の配分



(4) 完成品単位原価

$$\frac{(\text{前工程費 } 453,000\text{千円} + \text{加工費 } 1,140,000\text{千円})}{\text{完成品 (第一 } 900\text{kg} + \text{第二 } 1,800\text{kg})} = 590\text{千円}$$